

先月の19日、20日、古谷部長と共に仙台に行ってきました。目的は新しい施設の参考にと宮城県のこども病院の見学、長年の仲間である仙台つどいの家（重い障害の方々の日中活動、社会参加を進めている通所施設—重症心身障害児者も通ってきている）の様子を知る、更に荒浜地区を訪ねる、の3つでした。

19日は集いの家は祭日で休みのため仙台到着後すぐつどいの家下郡山施設長と運転担当の山口副施設長の案内で荒浜地区へ。目の前に何もなただ草ぼうぼうの地面があらわれあちこちにまるで迷子になって、場違いの場所に迷い込み立ち往生しているような船を見たとき、津波が現実であったことを実感し身震いしました。あのテレビの画面で言葉もなかった大津波の映像が浮かんできました。あちこちに家が建っていました。震災半年で復興の兆しかとよく見ると、家の中はがらんどろ、波が家の中身は全て持ち去ったのでしょう。ただ柱だけの家々でした。その家の中身と共にそこに住んでいた人も波は持ち去ったのではとその光景を想像し「怖い」と思わず口にしました。瓦礫はさすがに片付けられ、自動車は一箇所に、瓦礫は大きな山になっていました。海岸に出てみました。長く続く穏やかな海岸線。「仙台の人は、いつも夏はここに海水浴にきたのよ」と下郡山さんが言いました。テレビで何度も放映された仙台空港が遠くに見えました。家の土台だけが残っているところを歩いているとあちこちに可憐なピンクのコスモスが風に揺れています。昔学生時代英語のテキストに、東京空襲の後、最初に焼け跡に咲いた花がコスモスだったと書いてあったのを思い出しました。コスモスは可憐だけど生命力の強い花だとあったのは本当だったんだとそのコスモスにカメラを向けました。



コスモス

塩釜に向かう途中、小さな授産施設に寄りました。看板は残っていましたが中はがらんどろ。無残な状況です。みんなは避難したのですが、もし迎えに来る人がいたらと避難場所を書いた紙を壁に貼りに戻った職員はみんなの所に戻ってこなかったそうです。手を合わせました。



中ががらんどろになった授産施設

身体障害の人の多いある施設では、施設長が、車椅子やストレッチャーはいらない、おんぶしてすぐ自動車へ、と全員を誘導、車で逃げて全員助かったとのこと。もし車椅子を押して逃げていたら・・・と、とっさの判断で運命が分かれたことを知りました。

塩釜漁港に船は戻っていましたが活気はまだ。お土産を買うことでいくらか貢献できた

らと古谷さんとたらこや鮭等を買いました。

翌日 20 日は本格的な雨、仙台つどいの家に行きました。つどいの家は一度訪ねたことがありましてので懐かしい思いが湧いてきましたが、先ず目に入ったのが青シートのテント。そのテントの中に 7～8 人の人が座っていました。雨なので肌寒い陽気です。お天気の良いときは「青空教室なのよ」と下郡山さん。職員は次々自家用車で到着する利用者の人たちの迎えを傘をさしながらてきぱき行っていました。一部の人たちは今借りている場所、車で 30 分離れている障害者センターへ。又一部の人とは同じ法人で被害を受けなかった生活介護事業所コペルへ。

ある人たちは、何とか使えるパン工房でパンづくり。今はそれでも落ち着いてきた、当座はあちこち活動できる場所を借りて移動ばかりだったと聞きました。仙台つどいの家はもともと埋立地に建てられていたため、今度の大地震で地盤が沈下（20 センチくらい）。建物が傾きました。危険なので利用者の方々は出入り禁止。職員がトイレ等一部利用しているという状態です。「今地震が来ると危ないけど」と言いながら下郡山さんに中を案内してもらいました。ホールの天井が落ちていました。天井が落ちたのは 4 月にあった大きな地震によるものだそうで、夜の 10 時ごろだったので誰も被害がなかった、日中だったら誰かが大怪我をしていた、と聞きぞっとしました。床はボールを転がすと転がっていくだろうというほど斜めに傾いています。室内は品物が散乱。職員は利用者の対応で精一杯、疲れ切っている職員に散乱している部屋の片づけは頼めない、貴重な書類だけは集めてコペルに置かせてもらっているということでした。

つどいの家から若林区で難を逃れたコペルへ。コペルは新しい施設であることもあって日常を感じましたが、ホールをつどいの家のみんなが借りているのでやはり本当の日常ではないのだろうと察しました。つどいの家でも感じましたが、ここでも職員の明るさ、てきぱきした動きに感服しました。みんな前向き、と一言で言うのは簡単ですが、本当にみんなの口から「大変」と言う言葉がでてこないのです。私たちを迎える職員が忙しいなか、みな笑顔で挨拶をしてくれ気持ちよく質問に答えてくれました。感謝しました。

当センターから現場への支援に行ってくださった入岡さん、飛田さんの両名については「さすがに横浜療育医療センターの職員ですね、本当に力になっていただきました。また来ていただけないかなー」とラブコールが多かったこと、理事長の鼻が高くなりました。お二人にありがとうございました。重症の方たちの身体が硬くなっていくのがとても心配です、PTの方の支援がほしい、と看護師の方がおっしゃっていました。

センターの、つどいの家への義援金の集まりが小額なのを恐縮していましたが、額ではない、ずっと支援してくださるお気持ちが何よりの私たちへの励ましになるのだから、という下郡山さんの言葉に改めて私たちの役割を思いました。

午後 2 時に「こども病院」に。渋滞で 15 分の遅刻でしたが整形外科の奈良先生が玄関ま

で出て出迎えて下さいました。私自身は2度目の訪問です。最初の訪問時（今から10年前でしょうか）、全く病院の匂いのしない明るい、まるでおとぎの国のような印象が残っていたので、今回の新施設に何かのヒントをいただけないかと訪れたのです。

まず建物全景が病院という雰囲気ではなくしゃれた色使いとデザインに改めて最初に訪れたときに感じた印象を思い出しました。まず玄関に入ってびっくり。やはりおとぎの国です。大きな赤いポストの滑り台、4回までの吹き抜けの壁にはまるで建物の外のような可愛い窓がいっぱい。カラフルなビー玉が天井に埋め込まれた丸いエレベーターは大人の私が「乗りたい！」と叫ぶほど魅力的です。



赤いポストの滑り台



エレベーター



玄関を入ったところ

なるほど、不安で一杯のお父さん、お母さんそしてお子さんもこの玄関に入ったとたん不安を忘れて楽しい遊びの空間に飛び込んでしまう、そんな見事な演出です。建物全体にカーブが多くなんともやわらかい雰囲気はここから生まれるのかなと思いました。色使いも見事で、明るい色なのに原色ではなく、北欧調と言うのでしょうか。レンガ色も、ワイン色も、山吹色も、少しくすんだ色調で明るい中でも落ちついた感じです。建物全体の曲線と色使いは是非見習いたいと思いました。音楽会用に作られたピアノが置いてあるホール（200名収容可能）がありましたが、そちらは、今は研修用に使われることが多く、音楽会は玄関ホールを使用することが多く、2階、3階からホールを覗くと、壁に窓が作られているため、まるで街角で奏でられている音楽を聴くようで、子どもたちや家族が楽しんでいるということでした。ホールを覗くことができる窓にはこれも曲線で外側にカーブした柵が出来ていて一本、一本の柵の頭にはボール状の頭がついていました。



壁に作られた窓



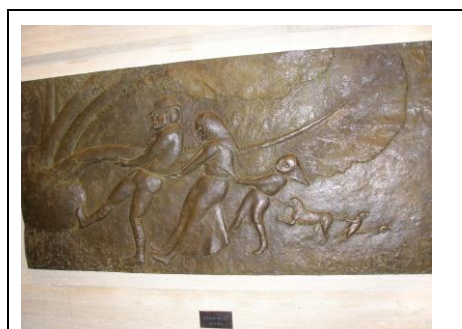
カーブした柵

子どもたちの目線、家族の目線で考えたちょっとした工夫、それが実は一番大切なのだと感じました。子どもたちがストレッチャーに乗せられて手術室に向かう廊下の壁には、丁度子どもの目の高さに、色々な動物の絵が描かれていて、それが一つのお話しになるようになっていました。この動物のお話しを聞きながら手術室に向かう、少しでも子どもの不安を軽くするこれも工夫なのだと、その心配りに感心しました。

入院は全て個室。真ん中にかかなり広い看護ステーションがあり、そこからちょうど鳥の羽を広げたように右に10、左に10、更に廊下を挟んで10、10と全体で40室が2階、3階に設置されていました。一つの病室に家族が泊まれるように簡易ベッド（昼は椅子、夜は延ばしてベッドになる）があり、トイレもついています。入院されているお子さんのお母さんに聞くと、各部屋にトイレがあるのでとても落ち着くという話でした。

職員の動線も勿論大切です。それと同時に、利用者の目線への心配りが設計図のなかで形になる、その見事な見本を見せていただきました。

何よりもこの施設の役割は何か、ミッション、理念、立ち位置、これらがしっかりとっていてよいハードが出来上がり、それがソフトと連動してよい実践が行われるのだということを改めて実感しました。ホールの壁に1メートル四方あるでしょうか。仙台出身の高名な彫刻家佐藤忠良先生の銅版画「大きなかぶ」（あの絵本の表紙そのままの絵）が設置されているのがとても印象的でした。



佐藤忠良作「大きなかぶ」の銅版画

これから進められる新しい施設建設に向かって対象の年齢、施設の性格は違っても、多くの気付きとヒントを頂きました。

帰路の新幹線の中で宮城のお弁当を食べながら疲れを忘れて話しが弾んだのは勿論です。

23年10月4日